

館林町消防組沿革史

K31
A

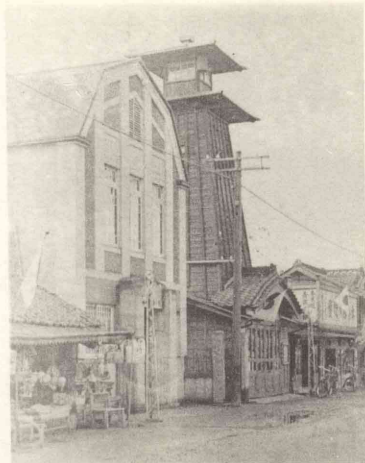
群馬縣館林町消防組沿革史

群馬縣館林町消防組沿革史

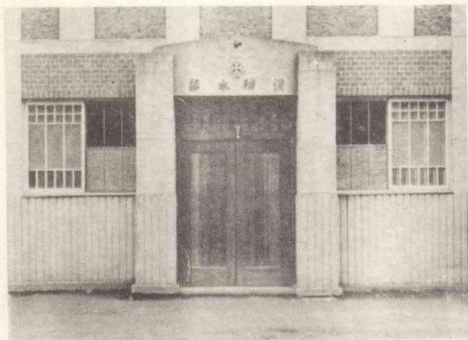
目次

緒言	(一)
町勢	(一)
第一章 起源	(二)
第二章 組織	(二)
第一節 番組時代	(二)
第二節 勅令消防組組織當時	(四)
第三節 四部制時代	(五)
一、小頭代理及予備消防手設置	(五)
二、予備消防手廢止、役員變更	(六)
三、第三部消防手定員増加	(六)
四、副組頭一名任命ニヨル定員増加	(七)
第四節 五部制時代	(七)
第五節 六部制時代	(八)

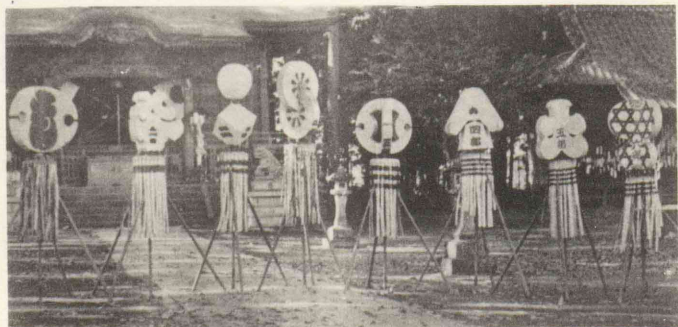
第六節 現在	(八)
第三章 役員	(九)
第一節 組長	(九)
第二節 組頭	(一〇)
第三節 部頭	(一〇)
第四節 現任役員	(一一)
第四章 賞罰	(一二)
第一節 組	(一二)
第二節 部	(一四)
第三節 組員	(一七)
第五章 機械器具	(一九)
第一節 唧筒	(一九)
第二節 器具	(二二)
第六章 建造物及其他ノ設備	(二三)
第一節 火之見、望樓	(二三)



館林消防火の見櫓並ニ本部遠景



館林消防本部



六部制時代ノ各部署

第二章	器具置場及建物	(二四)
第三章	貯水池	(二五)
第四章	施設	(二七)
一、火防調査表		(二七)
二、水利調査表		(二八)
三、火災保険調査カード		(三三)
四、非常電話通知方法		(三四)
第七章	災害記録	(三四)
第八章	雜錄	(三七)
第九章	諸統計及諸給與一覽表	(三八)
第一節	火災度數原因及損害年表	(三八)
第二節	警備費	(三八)
第三節	諸給與	(四〇)
附群馬縣消防歌		(四一)
館林消防小唄		(四二)



氏郎四善藤伊故頭組代初



氏郎三宗林小頭組目代三



氏作幸藤遠故頭組目代二



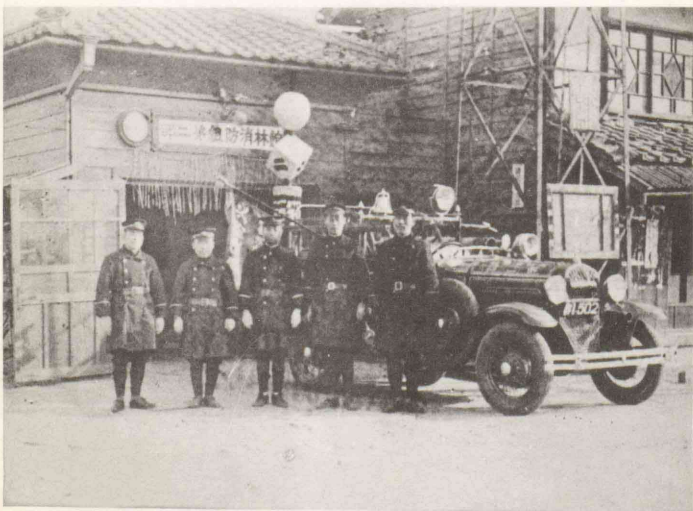
氏次平茂塚毛頭組現



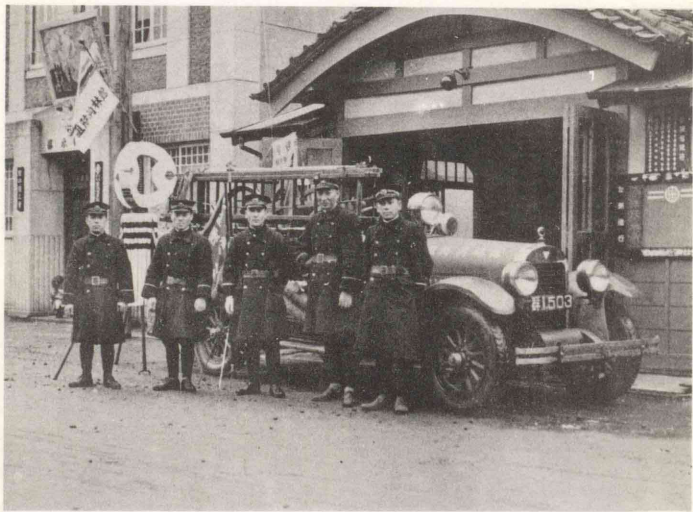
氏郎太光田坂頭組副現



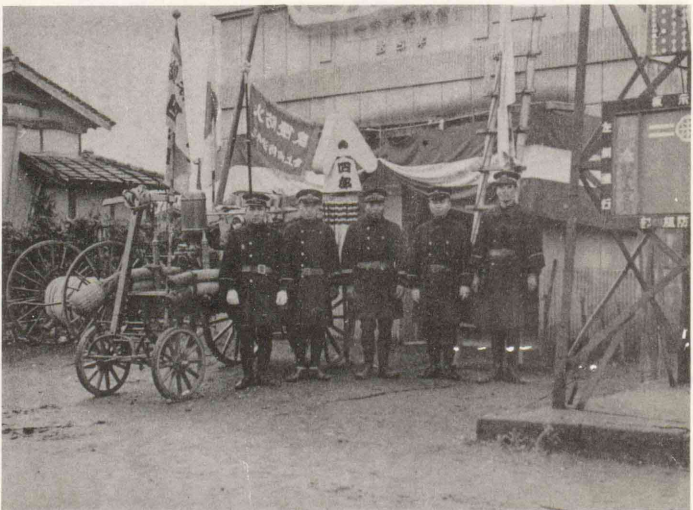
員役 = 並場置具器部一第



員役 = 並場置具器部二第



員役 = 並場置具器部三第



員役 = 並場置具器部四第

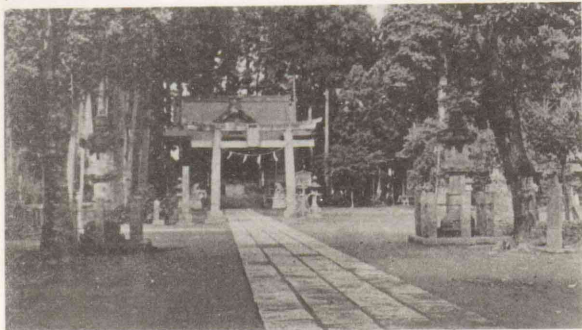
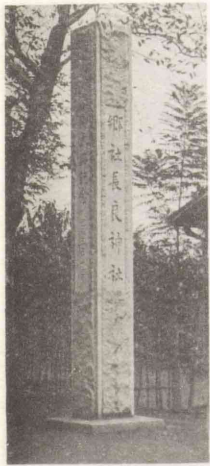
部制改革ノ際記念トシテ尾曳
神社ニ奉納セル第三部ノ額面



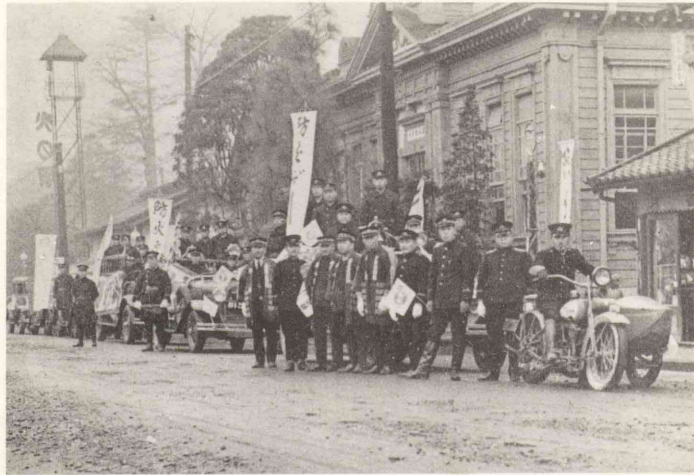
三ノ丸ニ於ケル創立十年記念移植櫻樹ノ碑



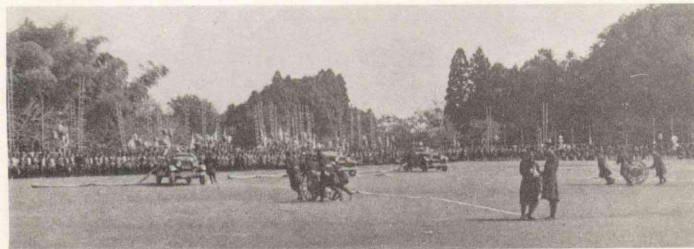
創立三十五年記念トシテ郷社ニ
奉納セル社標



籠燈石納奉念記年十二立創ルケ於ニ社神良長社郷



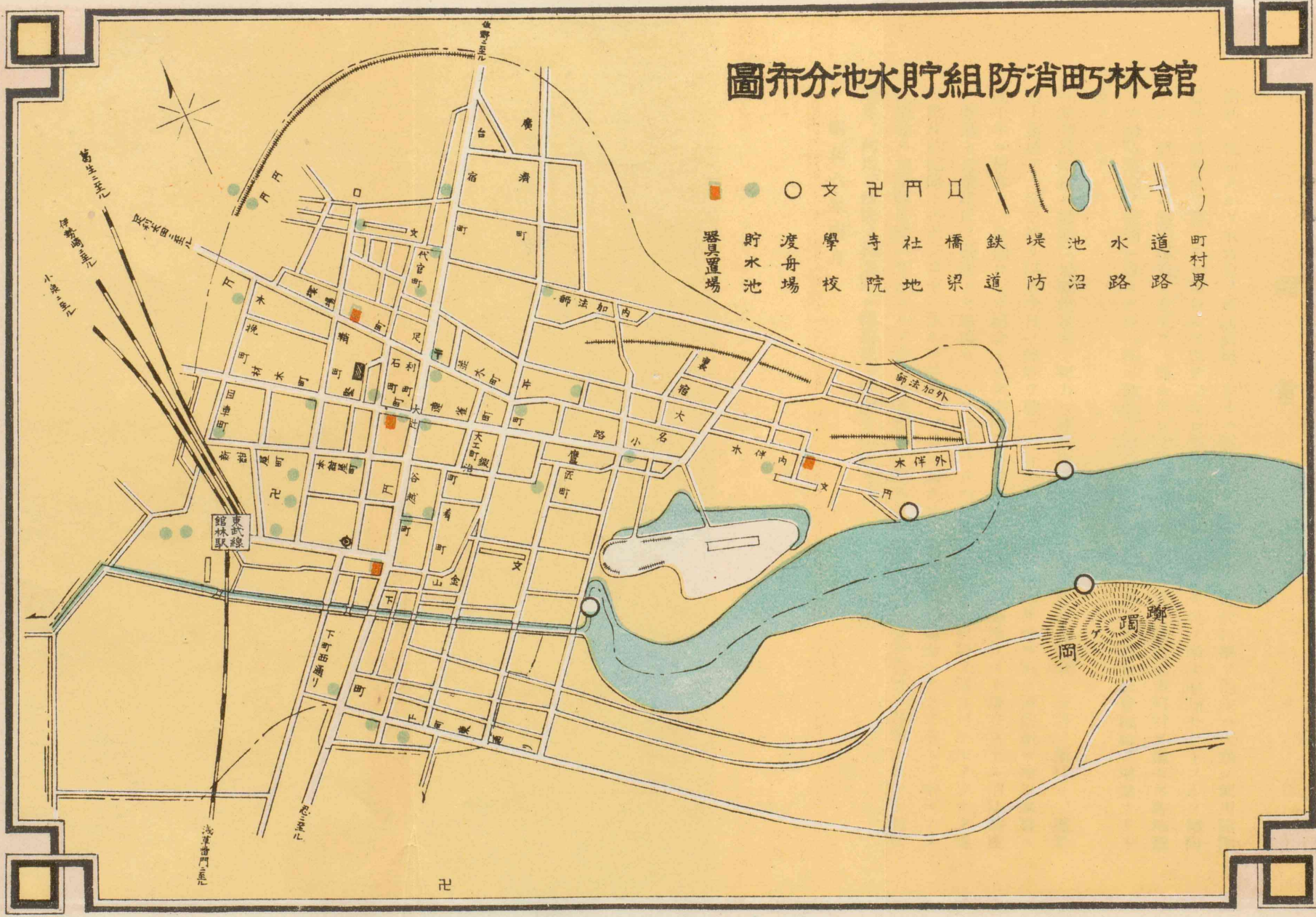
景光ノ發出前署察警林館隊傳宣郡本一デ防火下縣馬群



際ノ檢點合聯村ケ六町一ルケ於ニ園公良長
景光ノ法操台三筒唧車動自林館

館林町消防貯水池分佈圖

- 文
 - 卍 社
 - 門 橋
 - 口 鐵道
 - / 堤防
 - \ 池沼
 - / 水路
 - \ 道路
 -) 町村界
- 器具置場
 - 貯水池
 - 渡舟場
 - 學校
 - 寺院



緒言

消防ノ使命タルヤ水火災ノ警防鎮壓ニ在ルハ言フ俟タズ、然ルニ近代科學ノ進歩ハ火熱ノ使用範圍頗ル多岐廣汎ヲ要スルニ至レルヲ以テ、コレ等ヲ原因トシテ起ル火災ノ漸次増加セントスルノ傾向アルハ蓋シ不可避的現象ナリトス。而シテコノ災禍ヲ防遏センガ爲メ輒近都市町村ヲ論セス各地競ツテ消防施設ノ完備ニ汲々タルハ洵ニ當然ノ歸結トスル處タルト共ニ亦以テ社會福祉ノ増進ナリト謂フベシ。

我館消防組ハ組織以來歴代當局ノ努力ニ依リ幾度カ制度ノ改革及器具機械ノ改善ヲ斷行シ、逐年向上發展ノ一途ヲ辿リ以テ今日ノ陣容ヲ整フルニ至レリ。而シテ本年恰モ勅令消防組々織以來實ニ四十年ニ相當ス。今回コレガ紀念トシテ本町消防沿革史ヲ編シ、舊幕時代ヨリ現在ニ至ル消防制度ノ變遷ト先輩諸氏ノ勤歷トヲ叙述セントス。憾ラクハ遡リテ正確ナル史料ノ徵スベキモノ少ナク纔ニ斷片的記録ト古老ノ口傳ニ依ルノ外ナシ。茲ニ聊カソノ梗概ヲ綜合摘錄シテ之ヲ草ス。幸ニソノ杜撰咎メズ閱覽ヲ給ハラシコトヲ希フ。尙本稿ヲ編スルニ當リ幾多ノ參考資料ヲ寄與セラレシ田口岩尾、内田、蛭間ノ諸老並ニ福田氏ノ好意ヲ深謝ス。

昭和八年四月

町 勢

館林町ハ群馬縣ノ東南端ニ位スル邑樂郡ノ中央部ニ有リ、南ハ二里（八籽米）ニシテ利根川ニ北ハ一里（四籽米）ニシテ渡良瀬川ニ達シ地勢平坦ナリ。町形ハ東西二十三町（二、五〇九米）南北十三町（一、四一八米）ニシテ之カ面積ハ〇、二八方里（四、三平方籽）ナリ。

戸數三、七〇九戸 人口一七、六五九人（男八、四六四）又町豫算ハ一三四、七〇九圓ヲ算ス

本町ハ明治二十二年四月町村制施行ニ際シ舊城内及其隣接地タル谷越村、成島、當郷、西村ノ一部ヲ合併シテ館林、谷越、成島、當郷ノ四大字トナセリ。而シテ現在ノ市街地ハ何レモ小字名ニシテ本城、八幡廓、二ノ丸、三ノ丸、應匠町、城沼、大名小路、稻荷廓、外伴木、内伴木、外加法師、加法師、廣濟町、裏宿、片町、台宿町、足利町、並木町、連雀町、大工町、鍛冶町、金山、肴町、谷越町、堅町、本紺屋町、新紺屋町、目車町、木挽町、材木町、鞆町、石町、塚場町、代官町、下町等ニシテ近年異常ナル發達ヲ遂ケ全ク舊來ノ面目ヲ一新シ市況年ト共ニ殷賑ヲ極ム。

町會議員定數ハ二十四名ニシテ全町ヲ二十三行政區劃トナシ、各行政區ニ區長及全代理者ヲ設置シ以テ自治並官治行政ヲ司リツ、アリ。

沿革史

第一章 起源

文政二年正月廿一日本町ニ大火アリ、當時ノ城主松平右近將監、火消組設置ノ必要ヲ認メ同年十一月江戸火防組ニ倣ヒ火消組ヲ組織セシム、之ヲ本町消防組ノ濫腸トス爾來引續キ藩監督ノ下ニ屬シ火防ノ任ニ當ル、現在大辻西ニアル火之見櫓ハ文政年間ニ藩主ノ命ニ依リ江戸堀留ノ櫓ヲ象リ之ヲ造營セシモノナリト傳ヘラル古風掬スベキモノアリ、尙當時各町内ニモ自身番アリ毎戸ノ若者町火消トシテ雲龍水等ニヨク消防ノ任ニ當レリ、引續キ明治初年ニ至リテモ尙コノ狀態ニアリシガ器具機械ノ貧弱劣勢ナル爲メ出火ニ際シテハ刺又、梯子、斧、嵩等ニテ所謂破壞消防ニヨリソノ延燒ヲ防グノ有様ナリシカバ自然町火消ノ意氣壯ンニシテ現場ニ望ミテハ競フテ消口ヲ争ヒソノ決死的行動ハ至ク江戸火消ノ傳ヲ寫シテ勇壯ヲ極メ當時ノ消防ニシテ防火ノ巧妙迅速ナル事近隣ニソノ比ヲ見ズト唱ハレシモノナリト云フ 弘化三年午七月井上河内守ヨリ秋元但馬守ニ御引渡書中消防ニ關スル記録ヲ見ルニ當時城内並ニ町内出火ノ際ハ兼而申付アル三組ノ火消人足等早速左記ノ機具機械ヲ持チテ火事場ニ驅付ケ防火ニ勉メタルモノナリ

.....(1).....

- 一纏 拾六本
- 一梯子 拾參本
- 一薦口 百六拾本
- 一叉 七本
- 一龍吐水 參挺
- 一箱釣瓶 貳拾個

第二章 組 織

第一節 番 組 時 代

明治七年三月舊城内ニ大火アリ宏大ナル舊城内ノ建造物殆ド烏有ニ歸セリ茲ニ於テ愈々火防機關ノ充實ヲ急務トスルニ至リ遂ニ全八年四月十九日始メテ全町ヲ統一セル消防組(一番組、二番組)ノ組織ヲ見ルニ至レリ

但シ一番組 所屬町内 (連雀町、足利町、並木町、鞆町、七ヶ町)
 (谷越町、台宿町、加法師、)

二番組全 (堅町、石町、材木町、新紺屋町、本紺屋町、十二ヶ町)
 (塚場町、目車町、木挽町、四ヶ町)

其後ニ於テ谷越村(下町)三番組トシテ加入セリ
 明治十五年ニ至リ組員ノ年令ヲ制限シ(十五才以上四十二才迄ノ戸主長男)役員モ世話方及重立ト稱セリ 器具機械モ稍整頓シ手力水ヲ使用スルニ至リ夜警制度モ規律的ニ實行セラレタリ、尙全年十二月九日点檢ヲ執行セラル 其記録ヲ一續セバ當時ノ模様殆ド想像シ得ベシ
 左ニ原文ノ儘ヲ摘録ス

明治十五年十二月九日消防器械揃順序

- 一、當日午前六時堅町火乃見櫓ニ於テ第一ノ號鐘ヲ打チ一番組ハ台宿町へ二番組ハ塚場町へ三番組ハ谷越町へ集合ノ事
- 一、第二ノ號鐘ニテ一、二、三ノ順序ヲ正シ点檢ヲ受ケ場所(大名小路)ニ相詰候事
- 一、器械ノ点檢ハ一番組ヨリ順次ニ始メ候事
- 一、点檢終リタル後ハ別紙之通りノ順ニ町ヲ巡回ノ事
- 一、巡回ヲ終リ足利町大辻ニテ手打チ之事
- 一、手打チノ節各組ノ立場、一番組ハ連雀町兩側ニ、二番組ハ堅町北側ニ、三番組ハ堅町南側ニ

整列ノ事

- 一、手打ノ合圖ハ櫓ニ於テ一ツ半鐘ヲ打チ合圖トシ一齊手打ノ事
- 一、各組引揚ハ手打ヲ終リ第一鎮火ノ號鐘ニテ一番組、第二ノ鐘ニテ二番組、第三ノ鐘ニテ三番組引上ケノ事

右之通り各組ノ協議ヲ盡シ處定届ケ出タルニ付之ヲ承認シ署名捺印ス

明治十五年十二月九日

警部 小島 金八郎 印

尙引揚後梯子乘之儀ハ町内及谷越村新宿之内四ヶ所ノ事 以上

爾來年ヲ經ルニ從ヒ益々發展ヲ遂ゲ明治廿二年始メテ獨逸式腕用唧筒ノ購入ヲ見ルニ至リ役員モ組長、副長、町内毎ニ及消防長ヲ置キ消防申合細則ヲ作製セリ、コノ細則ハ全廿七年勅令消防創立ニ際シ本縣公設消防組規則制定ノ爲メ當時ノ警察署長川畑警部殿ノ照會ニヨリ本縣黒川警部長殿ノ手許迄參考トシテ謄寫ノ上差出シタル旨附記シアリ、ソノ各條項ヲ見ルニ規律嚴肅、用意周到ヲ極メ今日我々ノ取りテ範トスベキモノ少ナカラズ

第二節 勅令消防組織當時

明治廿七年二月九日勅令ニ依ル消防組規則發布セラル茲ニ於テ從來ノ番組制度ヲ廢シ公設館林消防組トシテ之ヲ四部ニ分チ定員ヲ左ノ通り制定編成ス

組	部	名	部	頭	小	頭	消	防	手	計
一	部	部	一	六	七五	八二				
二	部	部	一	六	七五	八二				
三	部	部	一	六	七五	八二				
四	部	部	一	六	七五	八二				
組	頭	部	一	合計	三百二十九名					

但シ警報担当者各部(火之見ニケ所)正副四名宛消防手トシテ計上ス

第三節 四部制時代

一、小頭代理及予備消防手設置

明治卅八年定員ヲ減員ス即チ一部消防手四拾名、役員部頭一名、小頭二名、小頭代理二名、合計四拾五名トシ外ニ予備消防手制度ヲ設ケ一部ニ對シ貳拾名宛配屬セシム

部名	部頭	小頭	小頭代理	消防手	予備消防手	計
一部	一	二	二	四〇	二〇	六二
二部	一	二	二	四〇	二〇	六五
三部	一	二	二	四〇	二〇	六五
四部	一	二	二	四〇	二〇	六五
組頭 一名	合計貳百六拾一名					

二、予備消防手廢止、役員變更

明治三十九年予備消防手制ヲ廢シ壹部ヲ消防手六拾名、役員部頭一名、小頭三名、小頭代理一名、合計六拾五名トス、組員數ハ前年ト變更ナシ

三、第三部消防手ノ定員増加

大正八年三月始メテ瓦斯倫唧筒一台ヲ購入シ、更ニ全十年八月全三台ヲ購入シタル爲メ各部一台宛配置シタルモ第三部ノ受持區域廣汎ニシテ戸數増加セル爲メ大正十五年四月腕用唧筒一台ヲ配屬シ同部ニ限り消防手拾名(内小頭代理一名)ヲ増員シタリ、茲ニ於テ組員合計貳百七十一名トナレリ

四、副組頭一名任命ニ依ル定員増加

大正十五年十月二十五日副組頭一名任命セラレタル爲メ定員合計二百七十二名トナレリ

第四節 五部制時代

昭和元年十二月現代消防機械トシテ最モ優秀ナルハドソン自動車唧筒ヲ購入ス茲ニ於テ本町消防器具機械ニ劃期的改革ヲ見ルニ至レリ、而シテコレガ爲メ新ニ第五部(自動車唧筒ヲ配屬)ヲ増設シ置場ヲ本部火之見櫓下トシ部員拾七名ヲ各部ヨリ選抜シテ之ヲ編成シタリ、尙定員ヲ左表ノ通り減員シタリ

部名	部頭	小頭	小頭代理	消防手	計	
一部	一	二	二	五二	五七	
二部	一	二	二	四八	五三	
三部	一	二	二	五九	六五	
四部	一	二	二	五〇	五五	
五部	一	三		一三	一七	
組頭一名	合計貳百四拾九名					

組頭一名 副組頭一名

合計貳百四拾九名

第五節 六部制時代

昭和五年五月フオード自動車唧筒一台ヲ購入ス 茲ニ於テ更ニ一部ヲ増設シ六部制トシ尙器具ノ完備ニ伴フ係員減員ニヨリ左表ノ通り編成シタリ

部 名	唧筒名	部 頭	小 頭	小頭代理	消 防 手	計
一 部	フオード自動車ポンプ	一	二	一	一六	二〇
二 部	ガソリンポンプ	一	二	一	二三	二七
三 部	ハドソン自動車ポンプ	一	二	一	一六	二〇
四 部	ガソリンポンプ	一	二	一	二三	二七
五 部	全	一	二	一	二三	二七
六 部	全	一	二	一	二四	二八

組頭一名 副組頭一名 合計百五拾一名

第六節 現在 (四部制 小頭代理廢止)

昭和六年三月フオードコンマーションヤル自動車唧筒一台ヲ購入ス 茲ニ於テ自動車唧筒三台、瓦斯倫ポンプ四台トナレルヲ以テ部編成上ノ都合ニ依リ瓦斯倫ポンプ三台ヲ隣接各村ニ讓渡シ、定員ヲ減員シ、小頭代理ヲ廢止シテ四部制ト改メ左ノ通り配屬ヲ決定シ以テ現在ニ至ル

部 名	唧筒名	部 頭	小 頭	消 防 手	計	受 持 區 域
一 部	フオード自動車ポンプ	一	四	二九	三四	谷越町、下町、本紺屋町、新紺屋町、
二 部	全	一	四	二九	三四	堅町、材木町、塚場町、代官町、目車町、木挽町、鞆町、石町、
三 部	ハドソン自動車ポンプ	一	四	二九	三四	足利町、連雀町、片町、並木町、
四 部	ガソリンポンプ	一	四	二九	三四	台宿町、加法師、廣濟町、四ヶ町、十七區、内伴木、外加法師、

組頭一名 副組頭一名 合計百三十八名

尙從來各部ニ保管セル腕用唧筒ハ予備機械トシテ手入ヲナシ各適當ノ場所ニ備付ケタリ

第三章 役員

第一節 組長制

明治二十三年三月各番組ノ最高役員ヲ組長、副長ト呼ブ事ニナリ本縣黒川警部長ヨリ左記氏名ヘ對

シ辭令ヲ交附セラル

- 一番組 組長 伊藤善四郎 副長 田口孫造
- 二番組 組長 内田藤吉 副長 平野米吉
- 三番組 組長 小暮兵吉 副長 鈴木金五郎

第二節 組 頭

氏名	拜命年月日	被免年月日
初代 伊藤善四郎	明治廿七年十一月十四日	大正五年三月四日
二代 遠藤幸作	大正五年三月四日	大正十五年八月十八日
三代 小林宗三郎	大正十五年八月十八日	昭和五年五月六日
四代 毛塚茂平次	昭和五年五月六日	

備考

第三節 部 頭

明治廿七年十一月以來歷代ノ部頭氏名左ノ如シ

- 第一部 奈良原 金七郎 橋田福三郎 伊藤三清郎 須永茂八
- 正田 幸藏 鈴木金五郎 瀧澤 禎藏 小林鐵太郎
- 正田 茂吉 白井伊三郎(現在)
- 第二部 荒井彦次郎 正田 藏吉 川村 三藏 蛭間 浦吉
- 毛塚 善六 正田 延太郎 泉田 恭藏(現在)
- 田口 孫造 田沼 榮吉 鈴木 嘉助 森田 米吉
- 第三部 關井清三郎 齋藤 廣吉 小林宗三郎 蓼沼 芳藏
- 大島通太郎(現在)
- 第四部 佐藤 吉藏 上岡 平次郎 鈴木 平三郎 渡邊 榮作
- 榊田 瀧五郎 遠藤 幸作 谷田川 佐平 毛塚 茂平次
- 榊田 竹三郎 布川 啓藏(現在)
- 第五部 坂田 光太郎 柿本 友吉
- 第六部 瀧澤 猶造

第四節 昭和八年一月現在各部役員左ノ如シ

- 本部 組頭 毛塚茂平次
- 副組頭 坂田光太郎
- 小頭 栗原猪十郎 (但シ第四部附小頭ヲ以テ當ツ)
- 第一部 部頭 白井伊三郎
- 小頭 小倉徳次郎 栗田英八郎 正田松之助 向傳三郎
- 第二部 部頭 泉田恭藏
- 小頭 塚原喜太郎 須永友吉 毛塚晋次郎 毛塚榮一郎
- 第三部 部頭 大島通太郎
- 小頭 松本庫之助 壺田七藏 和田義定 谷田川熊太郎
- 第四部 部頭 布川啓藏
- 小頭 長澤榮吉 朝倉健一郎 栗原猪十郎 大津辰雄

第四章 賞 罰

第一節 組 賞 狀

館林消防組

規律嚴肅訓練優秀且消防用機械器具整備シ他ノ模範トスルニ足ル依テ其ノ賞トシテ旗一旒ヲ授與シ茲ニ之ヲ旌表ス

大正五年二月十一日

群馬縣知事正五位勳四等 三宅源之助 團

感 狀

館林消防組

客年秋季點檢施行ノ後一層事務ノ整理ニ組員ノ紀律訓練ニ其ノ他改善ニ意ヲ致シ事績見ルベキモノアリ殊ニ客年十一月行ハセラレタル曠古ノ御大典ニ際シテハ特ニ火災警防ノ任ニ服シ期間中靜謐保全ノ目的ヲ全フシタルハ組頭以下役員ノ指揮宜シキヲ得タルト消防手諸

子ノ勤勉トニ外ナラズ其ノ功勞顯著ナリトス
今ヤ最モ火防警戒ヲ促スヤ切ニ急ナルノ秋協力一致益々奮勵努力シ更ニ一段ノ光輝ヲ發揚
セムコトヲ期スベシ
茲ニ平素ノ勤勞ヲ錄シ感狀ヲ授與ス
大正五年十月十一日

感謝狀

館林消防組

代表者 遠藤 幸作

大正十二年九月大震災群馬縣救護團へ百五拾六圓寄附ス仍褒章條例ニ依リ之ヲ表彰セラル

大正十四年七月一日

群馬縣知事從四位勳二等 牛塚虎太郎團

第二節 部

表彰狀

館林消防組第二部

滿五ケ年間全ク火災ヲ生セシメザリシハ平素火防ニ對スル施設宜シキヲ得タル結果ニシテ
其ノ成績優良ナリトス仍テ旗一旒ヲ授與シ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和三年十月一日

邑樂消防向上會長 佐藤 貞藏團

表彰狀

館林消防組第三部

滿五ケ年間全ク火災ヲ生セシメザリシハ平素火防ニ對スル施設宜シキヲ得タル結果ニシテ
其ノ成績優良ナリトス仍テ旗一旒ヲ授與シ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和三年十月一日

邑樂消防向上會長 佐藤 貞藏團

表彰狀

館林消防組第一部
滿五ヶ年間全ク火災ヲ生セシメザリシハ平素火防ニ對スル施設宜シキヲ得タル結果ニシテ
其ノ成績優良ナリトス仍テ旗一旒ヲ授與シ茲ニ之ヲ表彰ス
昭和四年十月廿七日
邑樂消防向上會長 篠原滋一郎

表彰狀

館林消防組第四部
滿五ヶ年間全ク火災ヲ生セシメザリシハ平素火防ニ對スル施設宜シキヲ得タル結果ニシテ
其ノ成績優良ナリトス仍テ旗一旒ヲ授與シ茲ニ之ヲ表彰ス
昭和六年十一月十日
邑樂消防向上會長 千輝初 實圃

第三節 組員

表彰狀

館林消防組
組頭 遠藤 幸作
消防用機械器具ノ改善其ノ他消防上特殊ノ施設經營ニ盡力シ其ノ功勳カラス他ノ模範ト爲
スニ足ル仍テ制規ノ功勞章ヲ贈與シ茲ニ之ヲ表彰ス
大正九年二月
群馬縣消防義會總裁
群馬縣消防義會長

右ト同文ノ表彰狀ニテ

群馬縣消防義會總裁ヨリ功勞賞ヲ授與セラレ表彰ヲ受ケタル氏名左ノ如シ
大正九年二月 組頭 遠藤 幸作
大正十四年三月 組頭 小林宗三郎

昭和二年四月	副組頭	谷田川佐平
全	第二部頭	正田延太郎
昭和四年四月	第一部頭	正田茂吉
昭和五年四月	第三部頭	蓼沼芳藏
昭和六年四月	組頭	毛塚茂平次
昭和七年四月	副組頭	坂田光太郎

館林町表彰規程第二條第二號ニ依リ館林町長ヨリ表彰セラレ銀盃ヲ授與セラレタル氏名左ノ如シ

大正九年五月	組頭	遠藤幸作
大正十四年五月	組頭	小林宗三郎
昭和二年五月	副組頭	谷田川佐平
全	第二部頭	正田延太郎
昭和四年五月	第一部頭	正田茂吉
昭和五年六月	第三部頭	蓼沼芳藏

第五章 機械器具

第一節 唧筒

昭和六年六月	組頭	毛塚茂平次
昭和七年六月	副組頭	坂田光太郎

明治二十七年十一月四部編成ト共ニ各町ノ腕用唧筒ヲ引續キ設備ス

大正八年三月東京竹田唧筒製作所ヨリ瓦斯倫唧筒一台ヲ購入シ各部ヨリ瓦斯倫係ヲ選定編成ス

大正十年八月帝國唧筒株式會社ヨリ瓦斯倫唧筒三台ヲ購入シテ各部壹台宛配置ス

昭和元年十二月二十五日日本自動車株式會社ヨリ最新式ハドソン自動車唧筒ヲ購入シ第五部ヲ新ニ組織シ消防本部内ニ配置ス

昭和五年五月日本消防機製造株式會社ヨリ新フオード自動車唧筒壹台ヲ購入シ同時ニ六部制ニ編成シテ第一部ニ新フオード自動車唧筒、第二部ニ瓦斯倫、第三部ニハドソン自動車唧筒、第四、第五、第六瓦斯倫唧筒ヲ配置ス

昭和六年一月小池製作所ヨリ新フオード自動車唧筒一台購入ス

全年三月部制ヲ第四部ニ編成替シ別表通り唧筒ヲ配置シ今日ニ至ル

現在 唧筒 一覽表

第一部自動車唧筒 A型フオード

購入年月日	昭和五年五月八日	最大放水壓力	二一〇封度
製作所	日本消防機製造株式會社	最大放水水量	三一三ガロン
唧筒型式馬力	タービン式三段 二十五馬力	最大放水射程	一六〇尺
價格	三、四五〇圓	最大真空度	二五吋以上
車体全長	一五、七尺	吸口徑	三吋二分ノ一
幅全	五、八尺	放口徑	二吋二分ノ一
高サ	六、六尺	總重量	五、〇〇〇封度

第二部自動車唧筒 A型フオード

購入年月日	昭和六年一月 日	最大放水壓力	二一〇封度
製作所	小池製作所	最大放水水量	三八三ガロン

第三部自動車唧筒 ハドソン

購入年月日	昭和元年十二月二十五日	最大放水水量	四〇〇ガロン
製作所	日本自動車株式會社	最大放水射程	一八〇尺
唧筒型式馬力	ロータリー式四十馬力	最大真空度	二五吋以上
價格	金九、〇〇〇圓	最大放水壓力	一七〇封度
車体全長	一五、四呎	吸口徑	三吋四分ノ三
全幅	五、七呎	放口徑	二吋二分ノ一

唧筒型式馬力	ロータリー式二十五馬力	最大放水射程	一六〇尺
價格	二六、〇〇圓	最大真空度	二五吋以上
車体全長	一四尺	吸口徑	四吋
全幅	五、六尺	放口徑	二吋二分ノ一
高サ	六、二尺	總重量	二五〇貫

位	置	所屬部	標	高	警	鐘	構	造	摘	要
谷越町大辻		三	四	十	尺	一	木	三	階	建造
										文政年間

第六章 建造物及其他ノ設備

第一節 火ノ見櫓

一、標旗	一、旒	一、斧	一、一
一、指揮旗	一、本	一、金挺子	一、一
一、纏	一、本	一、長蒿	一、五
一、高張提灯	一、張	一、手蒿	一、五
一、手丸提灯	五、張	一、練習旗	一、本
一、手長提灯	十、張	一、信號旗	二、本
一、喇叭	二、個	一、蠟燭箱	一、個
一、梯子	一、挺		一、個
一、刺叉	一、挺		一、個

高サ	七呎	總重量	二、八〇〇封度
第四部 瓦斯倫啣筒			
購入年月日	大正十年八月	最大放水壓力	一五〇封度
製作所	帝國啣筒株式會社	最大放水量	一七〇ガロン
啣筒型式	プランヂヤー式二十馬力	最大放水射程	一五〇尺
價格	金三千八百圓	最大真空度	二三吋以上
車体全長	八尺	吸口徑	三吋
全幅	四、二尺	放口徑	二吋二分ノ一
高サ	四、八尺	總重量	二〇〇貫

第二節 器具

各部機械器具一覽表

- 一、啣筒
- 一、台
- 一、水管車
- 一、台

谷越町坂リ	一	四十尺	一	鐵脚式	
下町	一	四十尺	一	"	
材木町	二	四十尺	一	"	
塚場町	二	四十五尺	一	"	
台宿町	三	四十尺	一	"	
モスリン新道	四	四十尺	一	"	
伴木	四	四十尺	一	"	

第二節 置場及建物

建物

位置	所屬部名	構造	使用種別	建設年月日
谷越町	消防本部	木造銅板葺二階建 階下十四坪二合五勺	階上十二坪二合五勺	大正十三年十二月
"	一	鐵筋コンクリート平家建	七坪	大正十五年三月

第三節 貯水池

位置	水量	構造	築造年月日
下町	一	木造亞鉛板葺平家建五坪二合五勺	大正十二年二月
塚場町	二	木造瓦葺平家建七坪	大正十一年三月
目車町	二	木造亞鉛板葺平家建二坪五合	不詳
谷越町	三	木造三階建九坪木造亞鉛板葺平家建六坪五合	大正十三年十二月 修理
台宿町	三	木造亞鉛板葺西洋造平家建八坪七合五勺	大正十四年四月
裏宿	四	木造瓦葺平家建五坪	大正六年十二月
伴木	四	鐵筋コンクリート亞鉛板葺五坪	大正十五年九月
谷越町大辻	二〇〇	鐵筋コンクリート	大正十四年十二月
金山吉田前	二〇〇	全 堀抜井戸付	大正十五年八月
代官町小學校庭	一五〇	全	昭和二年十月

堅町 金柵前	一五〇	全	全
足利町 琴平亭前	一〇〇	全	全
塚場町 柳田角	一五〇	全	全
目車町 鐵道踏切前	一五〇	全	全
材木町 中井前	一五〇	全	全
足利町 郵便局角	二〇〇	全	昭和三年八月
紺屋町 佐竹前	一五〇	全	全
紺屋町 佐竹前	一五〇	鐵筋コンクリート	昭和三年八月
谷越町 銀行前	一五〇	全	全
下町 火ノ見下	一五〇	全	全
モスリン新道 鈴木前	一五〇	全	全
片町 公園内	一〇〇	全	全
谷越町 停車場前	一四〇	全	昭和四年十月

第四節 施設

一、火防調査表

塚場町 置場前	一五〇	全	全
木挽町 受宕社前	一五〇	全	昭和五年十月
外伴 木荒井前	一五〇	鐵筋コンクリート	昭和六年十月
大名小路 丸七工場内	二〇〇	堀井戸	全
台宿町 長良神社入口	一六〇	鐵筋コンクリート	昭和七年九月
加法師町 齋藤前	一五〇	全	全

當消防組ハ火災季節(毎年十一月ヨリ翌年三月迄)ニ入りテハ毎月一回若シクハ二回ノ火防巡視ヲ行ヒ各部受持区域内ヲ毎戸ニツキ、カマド、煙突、其他火氣ノ場所ヲ巡視シ又全町一齊ニ消火器ノ検査ヲ執行シ以テソノ注意ヲ喚起シツ、アリ、亦火防調査表ヲ作成シ毎回巡視ニ際シテ各項ニ記入ノ上コレガ一見シテソノ成績ノ良否ヲ識別シ得ル様ニシソノ成績優良者ニ對シテハ表彰スルノ規定ヲ設ケ努メテ防火思想ノ普及徹底ヲ期セリ

館林消防組第三部火防調査表

姓名	月 日	回	竈	煙突	湯殿	薪炭	チマツ	消壺	取灰	電燈	其他	事	故

二、水利調査表

當消防組ハ常ニ全町ノ水利調査ヲ怠タラズ、貯水池ノ増設、通路ノ新開通等ニ鑑ミ毎年水利調査表ヲ作製シテ之ヲ各部ニ配付シ練習等ニ際シテハ終始之ヲ目標トスル訓練ヲ行ヒ一朝有事ノ場合ニハ

適切有効ナル活動ニ備ヘリ

館林消防組貯水池距離調査表

第一節	距離	第二節	距離
下町貯水池ヨリ	十二本	島田運送店	十本
遠藤穀店	十三本	東武變電所	六本
精麥會社	五本	東武住宅	六本
龍泉寺	十本	ス社油槽所	十二本
島田質店	六本	善導寺	六本
鶴田川ヨリ	六本	目車貯水池ヨリ	十五本
青物市場	八本	驛前	十四本
第一部ポンプ置場	七本	毛塚善六	十四本
南小學校	八本	本紺屋町貯水池ヨリ	四本
初引稻荷	十本	青梅天神	八本
警察署	十本	大導寺	四本
停車場貯水池ヨリ	十本	警察署	九本
		大辻貯水池ヨリ	九本

麻屋吳服店	六本	覺應寺	十六本
東京電燈	九本	目車町新紺屋町角ノ貯水池ヨリ	
群中前貯水池ヨリ		正田醬油會社	九本
東京電燈	六本	日清製粉會社	十九本
青梅天神	八本	木挽町愛宕神社前ノ貯水池ヨリ	
警察署	七本	應聲寺	十四本
大導寺	十二本	野島醫院	八本
増乃家	十本	塚田鐵工所	九本
一柳亭	七本	塚場櫛田ノ貯水池ヨリ	
和泉屋	十二本	變電所	十二本
第二部		丸上工場	七本
新紺屋町水會社東ノ井戸ヨリ		法泉寺	十二本
善導寺	七本	塚場置場前ノ貯水池ヨリ	
材木町家内町角ノ貯水池ヨリ		北校	十四本
役場	十二本	北校貯水池ヨリ	

五寶寺	十六本	金山貯水池ヨリ	
登記所	八本	南校	八本
長良神社	十四本	館林キネマ	五本
第三部		連雀町關井角マデ	八本
大辻貯水池ヨリ		大工町鍛冶町丁字路	十本
郵便局	九本	鍛冶町外池前丁字路	十三本
谷越臼井綿糸店	七本	一株亭	十八本
連雀町小辻	七本	増乃家	十八本
堅町小辻	五本	台宿十字路貯水池ヨリ	
足利町貯水池ヨリ		北校	十二本
琴平亭	六本	長良神社入口	十二本
並木町小辻	七本	加法師齋藤穀店	十二本
石町角	七本	琴平亭	七本
大辻	八本	上岡工場	六本
上岡工場	十本	三角公園貯水池ヨリ	

宮田工場	十本	元郡役所	十六本
加法師四角	十四本	モスリン新道貯水池ヨリ	
丸七工場	七本	裏宿モスリン合宿所	十八本
館林キネマ	六本	元郡役所	七本
第四部		鷹匠町天理教會	十本
女學校前貯水池ヨリ		富貴座	十六本
南條區長	八本	丸七貯水池ヨリ	
伴木貯水池ヨリ		富貴座	十二本
南條區長	十三本	モスリン新道貯水池ヨリ	
松ノ木柵川	二十一本	石橋町長宅	九本
女學校	二十本	金山貯水池ヨリ	
共立モスリン入口貯水池ヨリ		富貴座	五本
裏宿モスリン合宿	十七本	石橋町長宅	八本
旭屋酒店	七本	長良神社入口貯水池ヨリ	
尾形覺三	十八本	北小學校	十二本

戸張	十本	新開地	十七本
廣濟町	十五本	圓教寺入口	十本
加法師貯水池ヨリ		台宿町	十二本
片町公園	十四本		

三、火災保險調査カード

當消防組ハ火災保險調査カードヲ作製シ消防巡視ノ際毎戸ニ付キ保險契約ノ有無ヲ調査シ契約者ニ對シテハ各項ニ要點ノ記入ヲ乞ヒコレヲ本部ニ保管シ以テ本部消防上ノ參考資料トシツ、アリ

火災保險調査カード

契約者	住所		業	町	町	番地
	氏名	郡				
契約物件ノ所在地	館林町					番地
契約會社名						
契約金額	合計一金					會社代理店
保險率	千圓ニ對スル金					圓也
						圓也

契約年月日	昭和	年	月	日
満期年月日	昭和	年	月	日
家屋ノ構造				
商品又ハ家具				

昭和 年 月

日調査

館林消防組第

部

四、非常報告方法

當消防組ハ一朝有事ノ際ニ於テ敏速ナル出火報知ガ防火上最モ有効ナルヲ痛感シツ、アルニ鑑ミ非常報知機關トシテ郵便局ト協力シテ普通公衆電話ヲ利用シツ、アリ 即チ各部樞要部(役員、機關係等)ニ五個所宛約貳拾個所ヲ選定シ以テ出火ノ場合コレニ一齊信號ヲナシ直チニ出動シ得ルノ方法ヲ取リツ、アリ

第七章 災害記録

維新以前ニ於ケル本町大火ノ資料詳カナラズ、明治年間ニ入りテヨリ著名ナル大火ノ概況ヲ左ニ掲

明治七年舊三月三日午前九時半頃舊城内大名小路蟻川邸内ニ居住スル酒井亨方ノ殘火不始末ヨリ出火、折柄ノ北西烈風ニ吹キアオラレ火ハ見ル々南側通りヲ焼拂ヒ延イテ四方ニ延焼セリ、急ヲ聞クヤ各町ノ消防組ガ必死ノ防火モ効ナク大名小路ヲ八分通り焼キ拂ヒ火ノ手ハ忽チ舊城ニ燃エ移リ遂ニ宏壯華麗ヲ極メタル二ノ丸御殿、三ノ丸御殿、千貫御櫓門、新御殿等ヲ全焼シ一望焼野原ト化セシメ夜ニ入りテ鎮火シタリ、茲ニ舊幕時代ノ遺跡トシテ數百年來世人ニ喧傳セラレタル我が館林ノ名城モ一朝ニシテ烏有ニ歸セシメタルハ實ニ惜ミテモ余リアル所ナリトス

明治十年字台宿町西側加藤某方裏ニ住メル老人ノ綿繰リ中、機具ヨリ火ヲ發シ台宿町ノ北部ヨリ廣濟町ヘ延焼シ強烈ナル西北風ニ煽ラレ飛火シテ二ツ谷ノ地藏堂並ニ新加法師ヲ焼キ餘焰當郷村(丸屋敷)ニ及ビ天神社境内ニテ漸ク鎮火ス、實ニ全焼七十餘戸ヲ隣時ニシテ灰燼トナシタルハ恨事モ又甚ダシキカナ

明治二十年舊二月八日夜 晝ヨリノ風日歿ニ至ルモ鎮マラズ夜ニ至リテ益々烈シ 下町(當時谷越村ト云フ)東古河街道南側瀧澤某方薪小屋ヨリ出火シ(放火ナリキ)松島方ヨリ東ヘ下延焼シ尙北側ヘモ延焼シ全焼十八戸ヲ焼キテ南側ハ空地、北側ハ生垣ニテ延焼ヲ喰止ム、然シ烈風尙暴威ヲ猛シウシテ數町ヲ離レタル六郷村大字松原ニ飛火シ瀨山某々等(次郎右工門、御頭、名主)三戸ヲ焼拂ヒタリ

爾來同村民火事毎ニ飛火ヲ恐レタリト宜ナリト言フベシ

明治廿五年舊十二月八日午後五時半頃連雀町南側中央部林某料理店跡空家ヨリ出火シ折柄ノ大烈風ハ行人ノ歩行ヲ妨グル程ノ風速ニテ見ルノ内ニ隣接家屋ヲナメ盡シ、猛烈ナル火勢ハ地ヲ這ヒテ風下ヲ襲ヒタリ、スワ火事ト知ルヤ各消防組員ハ直チニ馳付ケ消火ニ狂奔セント雖モ何分ニモ劣勢ナル手力水ナルガ爲メ消火ノ効果少ナク、已ムヲ得ズ各戸ノ家根へ上リ破壊其他ノ方法ニ依リ辛クモ鎮火セシメタリトイフ、焼失戸數十八棟二十二戸ナリ、當時消防ニ參加シタル者ノ談ニヨレバコノ日ノ風速ハ驚タベキ程ニテ火災最中ニ諸所ニ飛火シ尙翌朝燒跡ヲ見ルニ灰燼ノ如キハ殆ド吹キ拂ハレ居タリシトイフ、以テ如何ニ烈風ナリシナル想像シ得ベシ

大正二年十二月一日午前一時館林町大字谷越村藤野某方木工細工場職人使用火鉢ノ殘火ヨリ出火シ全燒十八戸卅七棟、半燒三戸四棟、損害價格五方圓ト云フ、當消防組織以來未曾有ノ大火ヲ現出セリ、此ノ日西北風強ク南北ニ通ズル道路ノ西側ヨリ始マリ、シカモ火元ハ被害九棟ノ内材木ヲ貯藏セル六棟ヲ有シ火ハ見ルノ之レニ延燒シタルレバ火勢猛烈ヲ極メ火烟黒烟天ニ沖ス

之ヲ望見シタル四隣町村ノ消防組全力ヲ擧ゲテ來リ應援セルモ當時唧筒ハ總テ腕用ポンプナリシカバ遠距離ヨリノ送水困難ニシテ皆附近ノ庭或ハ屋内ノ井戸水ヲ使用セリ

隣家ニ延燒シタル火ハ幅員狹キ道路ヲ距テ東側ニ物凄キ勢ニテ延燒シ往來ハ火ノ海ト化シ交通不能

トナル、其ノ火ノ廻リ早キ事、實ニ驚クノ外ナカリキ、此ノ土地ハ水質悪シキ故多ク堀抜井戸ヲ用ユサレバ水深淺クシテ其ノ貯水量極メテ少ナク水利上非常ニ困難セリ、爲メニ火ニ逐ハレシ唧筒ノ移動等ニ相當苦心ヲナス、又遅レテ馳セ付ケタル消防組員ハ各受持唧筒ノ所在發見ニ苦ミ疲勞困憊ナシツツ奮闘セル友ヲ想ヒナガラ他部他町村ポンプノ應援等止ムナクセラレタルナリ

此ノ火災ニヨリ感ジクルハ「水利悪シク通路不便ナル所ノ水災ハ大ニナリ、善キ井戸ヲ所有セル家ハ類焼ヲマヌガルベシ」ト云フ事ナリ、爾來消防上ニ於ケル町民ノ努力見ルベキモノ有リ今日ニ到ル迄十九ケ年二戸以上ノ火災ヲ見ズ度數モ又減ズルニ到ル誠ニ喜ブベキナリ

第八章 雜 錄

◎明治卅七年四月勅令消防組織十週年ニ當リ勤績者表彰式ヲ舉行シ紀念トシテ三ノ丸公園ニ櫻樹一千本ヲ植樹シ園内一隅ニ紀念碑ヲ建設セリ

◎明治四十二年四月全上十五週年ニ當リ勤績者表彰式ヲ舉行セリ

◎大正四年四月全上二十週年ニ相當シ勤績者表彰式ヲ舉行シ紀念トシテ長良神社ニ石燈籠一對ヲ奉獻セリ

◎大正九年四月全上二十五週年ニ當リ勤績者表彰式ヲ舉行セリ

◎大正十三年四月全三十週年ニ當リ勤績者表彰式ヲ舉行セリ
 ◎昭和三年四月全三十五週年ニ當リ精勤者勤績者表彰式ヲ舉行セリ
 ◎全年十一月御大典紀念ノ爲メ郷社長良神社々前ニ社標トシテ一大石柱ヲ奉獻セリ
 ◎全年全月今上陛下京都ニ於テ御即位ノ御大典ヲ舉ゲサセ給フニ當リ消防功勞者トシテ縣消防組ノ代表トシ組頭小林宗三郎氏參列ノ光榮ニ浴セリ
 ◎昭和四年一月帝都宮城前范ニ於テ全國消防組代表者御親閱ノ御沙汰アリ組頭小林宗三郎氏參列ノ光榮ニ浴セリ
 ◎全年十一月水戸市常磐公園ニ於テ群馬、栃木、茨城三縣下消防組代表者御親閱ノ儀行ハセラル當消防組代表トシテ部頭坂田光太郎氏參列ノ光榮ニ浴セリ

第九章 諸統計及諸給與一覽表

第一節 火災度數原因及損害年表 (十ヶ年以降)

年次	度數	度數	燒失戶數	原因	損害見積
大正十二年	二	二	過	失	三、〇〇〇圓

第二節 經費及諸給與 (昭和七年度現在)

全十三年	〇	〇				
全十四年	一	一	殘	火		二、〇〇〇圓
全十五年	一	一	放	火		五〇〇圓
昭和二年	一	一	過	失		七〇〇圓
全三年	一	一	全			一、〇〇〇圓
全四年	一	一	全			一〇〇圓
全五年	二	二	殘	火		三、〇〇〇圓
全六年	〇	〇				
全七年	〇	〇				

警備費	五九五〇〇
經常費	四、四七五〇〇
臨時費	一、四七五〇〇

第一節 組員諸手当

年手当	組頭	副組頭	部頭	小頭	機關手	一等消防手	二等消防手
四五、〇〇	七〇	三五、〇〇	三〇、〇〇	一八、〇〇	三六、〇〇	—	—
出場手当	七〇	七〇	七〇	七〇	八〇	八〇	七〇
演習手当	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇

備考

烈風警戒手当晝夜八十錢 半夜六十錢
 防火巡視手当出場一人一日 金五十錢
 練習手当出場一人一日 金五十錢

附

群馬縣消防歌

一、吾が上つ毛の鎮めぞと
 赤き誠を一統の
 縣百萬の民のため

二、花美しき都にも
 人住む處災厄の
 思へば重き消防の

三、黒鐵溶くる夏の日に
 星影凍る冬の夜半
 人の生命と財寶との

四、使命尊み身を捧ぐ

見よや聳ゆる赤城山
 同じ精神に固めつゝ
 立てし治安の旗じるし

草屋いぶせき山邊にも
 襲はん時に備へたる
 任務負ふこそ譽なれ

焔を胃し火をくゞり
 眠る間もなき警戒に
 保護は吾等の手にぞ有る
 意氣は漲る大利根や

義勇に燃ゆる熱血は
あゝ坂東にかくれなき

吾等祖先の賜物ぞ
群馬男児を仰ぎ見よ

館林消防小唄

(館林小唄) みつる作

一、スツトコ上州カラツ風

赤城嵐が吹き出して

火事の季節となりました

ホラナリマシタ

二、スツトコ上州カラツ風

大人も子供も氣を付けよ

火事は油断のすきまから

ホラスキマカラ

三、スツトコ上州カラツ風

小供の火遊び注意せよ

火事の起りは隣一寸

ホラマツチヒトツ

四、スツトコ上州カラツ風

吹けば家屋もよくかはく

風で火の子が飛ばされる

ホラトバサレル

五、スツトコ上州カラツ風

注意ませう火の用心

火事を出さぬは町の爲め

ホラマチノタメ

昭和八年四月七日印刷
昭和八年四月九日發行



群馬縣館林町消防組

編輯
兼人

坂田光太郎

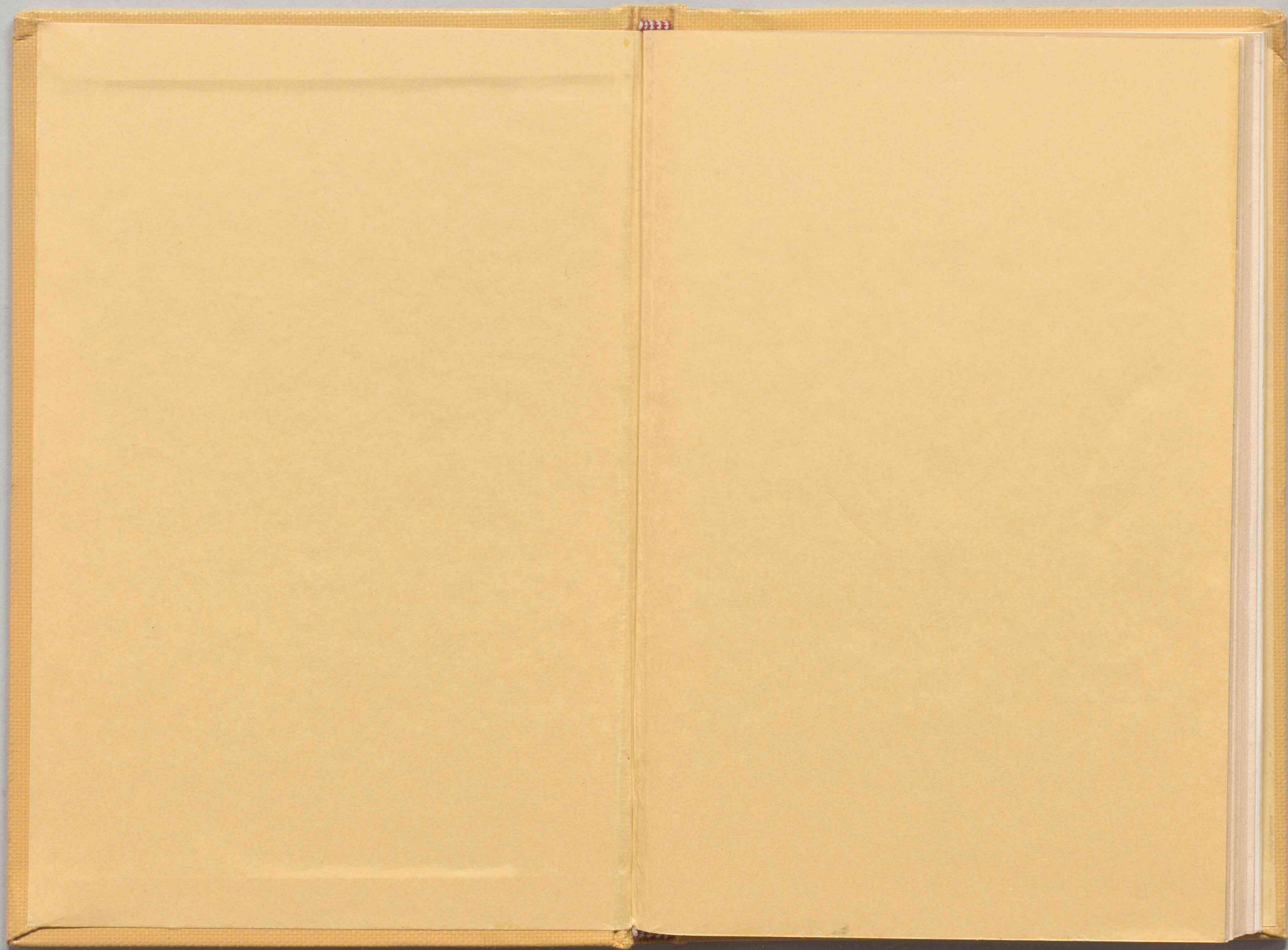
印刷
人

群馬縣館林町一八三五番地
齋藤良太郎

印刷
所

群馬縣館林町一八三五番地
齋藤印刷所





2.7
8

館林市立図書館



140031931